

## 要旨

日本語は、とくに話し言葉において、男性語と女性語の違いが比較的大きい言語だと言われている。では書き言葉において男女差はどの程度見られるのか。この点を明らかにするため、小中学生の作文を題材に接続語句の使用傾向について分析を試みた。分析の結果、①1作文あたりの平均接続詞数・全文数に対する接続詞率のいずれも顕著な男女差は見られないこと、②接続関係別の接続詞の使用比率では男子が「順接」接続詞を女子が「逆接」接続詞を使う比率が高いこと、③異なり語数は「対比」接続詞以外は全て女子の方が多いこと、などがわかった。この結果は先行研究の分析結果と必ずしも一致しない。書き言葉における接続語句の使用傾向には絶対的な男女差があるのではなく、文章のジャンル・テーマ、書き手の表現意識・能力などの要因によって男女差が生じる場合もある、という程度のものであると考える。

【キーワード】言葉の男女差 作文 接続語句 接続関係 異なり語

## 1. はじめに

日本語は、とくに話し言葉において、男性語と女性語の違いが比較的大きい言語だと言われている。<sup>注1</sup>しかし、言葉の男女差が縮まってきていることはすでに多くの場で指摘されているし、<sup>注2</sup>自分自身の言語生活を振り返ってみても実感できる。女性の言葉の男性化ばかりでなく、最近では男性の声が高くなり女性の声が低くなった、という報告もきかれるほどで、男性の言葉の女性化もかなり進んでいると考えられる。もちろんこれらの傾向には、佐久間（1979）も指摘するとおり、地域差・年代差・個人差がかなり大きいし、場面差もあるだろう。非常に広範囲の実態調査が必要だが、まだそういった研究は少ない。以上は、主として話し言葉に関する話であるが、一方、書き言葉は一般的に男女差がないと見られているようである。しかし、こちらの実態調査はまだ少ない。そこで本稿では、小・中学生の作文において接続語句の使用傾向に男女差が見られるかどうか確かめてみることにした。本稿に先立つ小川（1996）では接続語句の使用傾向に学年差があるかどうか分析してみたが、その結果、個々の接続詞の用法には学年差が見られる場合

もあるが全体的には大きな差は見いだせなかったため、別の要因として男女差を取り上げてみようと考えたのがそもそものきっかけである。また男女差についての先行研究がいくつかあるが、それらの分析結果は研究ごとにより異なっており、その要因を確かめてみたいと考えたのも本研究の動機の一つである。

接続語句は文章の結束性を保証する手段の一つとして表現指導の場などでも重視されている。また、文章の論理性・表現性の指標として接続語句を捉える見方もあり、文章特性の男女差を見る上で有効と考えた。また、まだ発達段階にある小・中学生の作文を分析対象としたが、これについては男女差と年齢の関係について見る上で何らかの示唆が得られると考えた。

## 2. 先行研究

接続語句使用の男女差について論じたものはまだ少ない。そのうち、特定の語だけでなく接続語句全般について論じたものとして、中田(1989, 1991)と佐久間(1979)がある。これらは分析の対象も方法も異なっており、単純に比較することはできないが、その結果はかなり異なっている。

中田(1991)は小学生の作文を対象に接続詞と男女差について分析し、主に「表現スタイル」「語彙レパートリー」の観点から見た結果、「いずれも数値の上で男子と女子の差が明らかに見てとれた」(P.10)としている。「表現スタイル」というのは「どういう意味範疇に属する接続詞を多用するか」という問題で、分析の結果、女子は逆接・転換といったマイナスの連関を表す接続詞を、男子は順接・添加といったプラスの連関を表す接続詞を多用する傾向があるとしている。「語彙レパートリー」というのは接続詞の異なり語数の問題で男子の方が女子を上回っている。そして、国語教科書を分析した中田(1989)でも同様の結果が得られていることから、これらの傾向が「日本語においてかなり一般性の高い実態であろう」(P.10)と述べている。

佐久間(1979)は著名人による月刊誌巻頭随筆と大学生による入社試験小作文を対象に接続語句使用の男女比較を試みている。これは一般成人(大学生からプロの文筆家までその幅は広いが)の使用傾向を見たもので、小・中学生の作文の場合とは多少性質が異なる。結果からは、接続語句の全文数

に対する使用比率と一人当たり平均使用数において男子の方が上回っていることを指摘しており、樺島・寿岳（1965）の資料を分析し直した結果からも同様の傾向を指摘している。また、接続類型別の使用率の男女差が比較的顕著なものとして、逆接・順接・補足は男の方が多く、添加・複合（異種の接続詞を重ねて用いているもの）は女の方がやや比率が高いと、述べている。

### 3. 方法

分析の対象としたデータは、文部省科学研究費補助金一般Bの助成を受けている「語彙研究会」（お茶の水女子大学と附属の諸学校との共同研究会）において収集したもので、お茶の水女子大学附属小学校の小学一～六年生、同中学一～三年生、同高校一年生・二年生、お茶の水女子大学の大学生及び留学生の各40名ずつ、計520名の書いた「手」というテーマの作文である。

（小学生、中学生、高校生のデータに関してはそれぞれ複数のクラスで採集した中から無作為に抽出した40ずつの作文が対象となっている。）ただし、小学一年から中学三年までは男女各20名ずつだが、高校以降のデータは全て女子のものなので今回は取り上げない。

採集時期は、1992年12月から1993年7月。採集に当たっては、「これから『手』という題で作文を書きます。どんなことを書いても自由です。400字詰め原稿用紙一枚で書きます。」とだけ指示し、時間制限を設けずに書かせた。文章量の少なさは出てくる接続詞の数に影響すると考えられるが、小学校低学年の児童にとっては400字でも精いっぱいであり、量をなるべく統一するため、このような指示を与えた。また書き方については書き手の裁量にまかされているので、スタイルの自由度はかなり大きい。このため随想的なもの、物語的なもの、説明的なもの等様々なものが含まれており、接続詞の使用傾向には多少差が見られる。

### 4. 分析結果

#### 4.1. 接続語句の規定と分類

基本的に比較の対象とした先行研究の規定に準じている。佐久間（1979）は、市川（1978）の説（接続語句とは「接続詞・接続詞的機能をもつ語句・接続助詞・接続助詞的機能を持つ語句の総称」である）を踏襲し、文中使用

【表1】市川（1978）による接続詞の分類

<p>①論理的結合関係</p>	<p>1. 順接型＝前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型            1.1. [順当]だから・ですから・それで・したがって・そこで・そのため・そういうわけで、それなら・とすると・してみれば・では            1.2. [きっかけ]すると・と・そうしたら            1.3. [結果]かくて・こうして・その結果            1.4. [目的]それには・そのためには</p>
<p>＝二つの事柄を論理的に結びつけて述べる関係</p>	<p>2. 逆接型＝前文の内容に反する内容を後文に述べる型            2.1. [反対・単純な逆接]しかし・けれども・だが・でも・が、といっても・だとしても            2.2. [背反・くいちがひ]それなのに・しかるに・そのくせ・それにもかかわらず            2.3. [意外・へだたり]ところが・それが</p>
<p>②多角的連続関係</p>	<p>3. 添加型＝前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型            3.1. [累加・単純な添加]そして・そうして            3.2. [序列]ついで・つぎに            3.3. [追加]それから・そのうえ・それに・さらに・しかも            3.4. [並列]また・と同時に・ならびに            3.5. [継起]そのとき・そこへ・次の瞬間</p>
<p>＝二つ（以上）の事柄を別々に述べる関係</p>	<p>4. 対比型＝前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型            4.1. [比較]というより・むしろ、まして・いわんや            4.2. [対立]一方・他方・それに対し、逆に・かえって、そのかわり            4.3. [選択]それとも・あるいは・または</p>
	<p>5. 転換型＝前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型            5.1. [転移]ところで・ときに・はなしかわって            5.2. [推移]やがて・そのうちに            5.3. [課題]さて、そもそも・いったい            5.4. [区分]それでは・では            5.5. [放任]ともあれ・それはそれとして</p>
<p>③拡充的合関係</p>	<p>6. 同列型＝前文の内容と同列とみなされる内容を後文に重ねて述べる型            6.1. [反復]すなわち・つまり・要するに・換言すれば・言い換えれば            6.2. [限定]たとえば・現に、とりわけ・わけても、せめて・少なくとも</p>
<p>＝一つの事柄に対して拡充して述べる関係</p>	<p>7. 補足型＝前文の内容を補足する内容を後文に述べる型            7.1. [根拠付け]なぜなら・なんとなれば・というのは            7.2. [制約]ただし・もともと・ただ            7.3. [補充]なお・ちなみに</p>

以外の接続詞及びそれと同じ様なはたらきを持つ語句（副詞・連語など）を対象としている。認定に際しては、「接続の意味関係の上からできるだけ広く取る」ことにして、市川（1978）青木（1976）の用例を参照した、としている。一方中田（1989,1991）は、「『岩波国語辞典』（第三版 昭和57年刊）記載の接続詞に従いながらも、適宜筆者の判断により付加したものもある」としているが、中田（1989）の「[表7] 接続詞一覧表」を見るとかかなり広くとっているようである。ここでは、より範囲の広い佐久間（1979）の認定に従ったが、結果的に中田の対象範囲とほとんど重なっている。また分類に際してはいずれも市川（1978）の分類に従っており、本研究もそれに従った。【表1】に市川の分類を下位分類と主な接続詞も併せてあげておいた。

#### 4.2. 結果

【表2】の上4段の「延べ語数」「標準偏差」「総文数」「接続詞率（＝延べ語数／総文数）」はいずれも学年全体で見た場合の値で、下3段の「平均接続詞数（＝延べ語数/人数）」・「平均文数（＝総文数/人数）」・「平均接続詞率（＝接続詞を持つ文数の全文数に対する百分率の平均）」は一人当たり（1作文あたり）の値である。

【表2】

学年	小 1		小 2		小 3		小 4		小 5		小 6	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
延べ語数	28	42	39	47	64	56	32	27	47	44	49	59
標準偏差	1.96	2.1	1.8	1.9	2.44	1.66	1.16	1.24	1.59	1.91	1.63	1.66
総文数	207	238	162	214	207	204	221	212	199	202	214	217
接続詞率	14%	18%	24%	22%	31%	27%	14%	13%	24%	22%	23%	27%
平均接続詞数	1.4	2.1	2.0	2.4	3.2	2.8	1.6	1.4	2.4	2.2	2.5	3.0
平均文数	10.4	11.9	8.1	10.7	10.4	10.2	11.1	10.6	10	10	10.7	10.9
平均接続詞率	17%	19%	27%	24%	31%	28%	15%	13%	24%	22%	24%	27%

学年	中 1		中 2		中 3		全 体	
	男	女	男	女	男	女	男	女
延べ語数	38	46	51	58	55	46	403	425
標準偏差	1.58	2.08	1.6	1.34	1.64	1.19	1.82	1.77
総文数	167	202	192	192	204	229	1773	1910
接続詞率	23%	23%	27%	30%	27%	20%	23%	22%
平均接続詞数	1.9	2.3	2.6	2.9	2.8	2.3	2.2	2.4
平均文数	8.4	10.1	9.6	9.6	10.2	11.5	9.9	10.6
平均接続詞率	24%	21%	28%	32%	29%	20%	24%	23%

佐久間（1979）では、平均接続詞数・接続詞率（接続語句を文頭に持つ文数の全文数に対する百分率）<sup>註3</sup>ともに男の方が数値が高かったが（平均接続詞数：随筆男6.45女5.05、作文男6.05女5.05、接続詞率：随筆男19.37%女14.57%、作文男30.56%女25.2%）今回の分析結果からは顕著な男女差は見いだせなかった。全体で見た場合、平均接続詞数は女の方がやや多いが平均文数も多いため結果的に接続詞率は男の方がやや高い、という結果になっている。また学年毎に見ていった場合、学年が上がるにつれて男女の使用傾向に違いが生じる、といった特徴は指摘できなかった。一方、中田（1991）は「接続詞率」を「接続詞の総単語に占める割合」として求めており値の性質が異なるため、こちらで接続詞数の総文数に対する割合を出してみたところ、小学1・2年生では女子の方が高く3年生以降は男子の方が高いという結果になった。

【表3】は接続詞延べ語数の接続関係別の使用率を出したものである。各接続関係ごとに比率の大きい方に網掛けを施してある。

まず全体で見た場合、使用数・比率の大きい順に「添加」「逆接」「順接」「同列」「補足」となっており、これは男女同じである。また、男女の差が比較的大きいものとして「順接」男21%>女13%、「逆接」男26%<女32%、「添加」男32%<女36%が挙げられる。ただし、比率の検定を行った結果、危険率5%レベルで男女差がみられるのは「順接」のみであった。佐久間（1979）で、男女差が比較的大きいものとしては、随筆の「順接」男19.38%>女13.86%、「転換」男15.50%>女9.9%、「添加」男15.50%<女31.68%、作文の「逆接」男25.62%<女30.69%、「補足」男12.40%>女6.93%となっている。そして、随筆と作文を合わせた全体で見ると、「添加」のみ女性の比率が高く、論理的結合関係（「順接」「逆接」）拡充的合成関係（「同列」「補足」）を示す接続語句はすべて男子の方が比率が高いということが、「一つの傾向を持つものとして確認される」としている。また中田（1991）は、プラスの連関を表す接続語句は男子の方が比率が高く（「順接」男16.8%>女13.3%、「添加」男53.4%>女38.0%）、マイナスの連関を表す接続語句は女子の方が比率が高くなっている（「逆接」男26.8%<女41.7%、「対比」男0.6%<女1.1%、「補足」男3.1%<女5.4%）と指摘している。

【表 3】

学年 接続関係	小 1		小 2		小 3		小 4		小 5		小 6	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
順接	9	4	6	9	16	9	8	3	11	8	13	7
	32%	10%	15%	19%	25%	16%	25%	11%	23%	18%	27%	12%
逆接	7	14	11	6	22	22	12	6	14	17	8	17
	25%	33%	28%	13%	34%	39%	38%	22%	30%	39%	16%	29%
添加	8	19	16	20	16	9	6	11	17	15	16	24
	29%	45%	41%	43%	25%	16%	19%	41%	36%	34%	33%	41%
対比	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	1	0
	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	4%	0%	2%	2%	0%
転換	0	0	0	0	0	1	1	2	1	1	0	0
	0%	0%	0%	0%	0%	2%	3%	7%	2%	2%	0%	0%
同列	2	2	3	7	4	5	4	2	3	1	6	6
	7%	5%	8%	15%	6%	9%	13%	7%	6%	2%	12%	10%
補足	2	3	3	5	5	10	1	2	1	1	5	5
	7%	7%	8%	11%	8%	18%	3%	7%	2%	2%	10%	8%
合計	28	42	39	47	64	56	32	27	47	44	49	59

学年 接続関係	中 1		中 2		中 3		全 体	
	男	女	男	女	男	女	男	女
順接	7	5	4	8	10	1	84	54
	18%	11%	8%	14%	18%	2%	21%	13%
逆接	11	19	12	21	8	14	105	136
	29%	41%	24%	36%	15%	30%	26%	32%
添加	7	16	20	19	24	21	130	154
	18%	35%	39%	33%	44%	46%	32%	36%
対比	0	0	1	0	1	0	4	2
	0%	0%	2%	0%	2%	0%	1%	0%
転換	1	0	1	2	1	1	5	7
	3%	0%	2%	3%	2%	2%	1%	2%
同列	8	3	7	5	10	7	47	38
	21%	7%	14%	9%	18%	15%	12%	9%
補足	4	3	6	3	1	2	28	34
	11%	7%	12%	5%	2%	4%	7%	8%
合計	38	46	51	58	55	46	403	425

使用比率の男女差がとくに大きいものを以下に挙げておく。

【表 4】

	男>女	男<女
佐久間 (1979) 随筆	順接・転換	添加
作文	補足	逆接
中田 (1989)	添加	逆接
中田 (1991)	添加	逆接
本研究	順接	逆接

【表5】は接続関係別の異なり語数を示したものである。全体で見た場合「対比」を除く全ての接続関係において女子の方が異なり語数が多い。また学年毎に見た場合も、小3・中1以外は全て（差の大きいものから小さいものまで色々あるが）女子の方が多くなっている。ところが先行研究ではいずれも、男子の方が多くの種類の接続詞を使い分ける傾向がある、と指摘しており、ここでも異なる結果が得られた。<sup>注4</sup>

【表5】

接続	小1		小2		小3		小4		小5		小6		中1		中2		中3		全体	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
順接	2	2	2	5	1	4	1	1	3	3	4	5	3	2	3	5	3	1	10	16
逆接	1	1	5	2	2	2	3	3	4	5	3	6	4	4	4	7	4	7	7	14
添加	4	8	7	9	7	2	4	6	6	9	8	6	4	6	6	9	8	8	15	18
対比	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	1	0	0	0	1	0	1	0	4	2
転換	0	0	0	0	0	1	1	2	1	1	0	0	1	0	1	2	1	1	4	5
同列	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	2	2	3	1	2	2	2	2	3	4
補足	1	2	2	3	2	3	1	2	1	1	3	4	2	1	3	3	1	2	4	6
合計	9	14	17	20	14	13	12	17	16	21	21	23	17	14	20	28	20	21	47	65

#### 4.3. 考察

二つの先行研究の分析結果が異なっていること、今回の分析結果もまた先行研究と異なっていることの意味について考えたい。

まず考えられるのは、そもそも接続語句の使用傾向に男女差はない、という判断だろう。ただ、そこに一定の傾向は見いだせないにしても個々の研究ごとに男女差は確かに存在しているわけで、これを男女差はないと結論づけるのはやや乱暴だろう。次に考えられるのは、研究方法等の条件の違いが結果に影響した可能性がある、ということだ。【表6】は条件の違いを一覧表にしたものである。見出しの記号は、佐久間（1979）のうち巻頭随筆に関する分析をA1、入社作文に関する分析をA2とし、中田（1989）のうち「作文」に分類されているものをB1、中田（1991）をB2、本研究をCとした。筆者が推測した部分も多く不完全なものであるが、これをもとにして考察を試みたい。



【表 6】

項目		A 1	A 2	B 1	B 2	C
書き手	職業・年齢	文筆家	大学生	不明	小学生	小・中学生
	執筆動機 文章意識	高い (仕事の原稿)	高い (入社試験)	不明	低い (被験者)	低い (被験者)
	文章力(熟達度)	高い	不明	不明	低い	低い
文章	ジャンル	雑誌の巻頭随筆	入社試験の 小作文	作文・ 日記など	実験のための 作文	実験のため の作文
	テーマ	多様	時事問題につい ての解説3問・ 入社後の抱負な ど2問	多様	「ぼくのゆめ」 「わたしのゆ め」	「手」
	長さ	原稿用紙 4～5枚程度	4文程度×5問	不明	原稿用紙 1枚程度	原稿用紙 1枚程度
データ	被験者数	男20 女20	男20 女20	不明	男346 女349	男180 女180
	接続詞使用総数 (文頭使用数)	男186 (129) 女144 (101)	男155 (121) 女158 (101)	男162 女191	男543 女616	男403 (385) 女425 (404)
	接続詞率	男19.37% 女14.57%	男30.56% 女25.2%	不明	男28% 女27%	男24% 女23%
	使用比率 上位3位	男逆・順・添 女添・逆・順	男女とも 逆・添・順	男添・逆・順 女逆・添・順	男添・逆・順 女逆・添・順	男女とも 添・逆・順
	異なり語数 *上位3位のみ	男32* 女21*	男17* 女16*	男29 女27	男36 女28	男47 女65

まず、書き手に関しては、「成人と小・中学生」または「プロと素人」に大きく分けられる。(B 1は除く。)成人の方が接続詞率の男女差が大きい  
が、データの数が少ないのでどの程度一般性があるのかはわからない。佐久  
間(1979)は樺島・寿岳(1965)のデータを用いて職業作家男85人女15人  
の小説の接続詞率を比較しているが、結果は男15.01%女8.86%でその差は  
一般成人のものより大きい。年齢が上がり、また文章に習熟するにつれて接  
続詞率の男女差が大きくなる可能性が指摘できるが、さらに別のジャンル  
(例えば論文など)で同じ傾向が見られるかどうか確かめる必要があるだろ  
う。一方B 2とCはどちらも発達過程にある小・中学生を対象としており条  
件的にはかなり近いのだが、接続関係別の比率・異なり語数などで結果が異  
なっている。テーマの違いが影響したとも考えられるが、他の要因もあるか  
もしれない。

文章に関しては、先に述べたとおり、文章が短いほど接続詞率が高くなっている。限られた分量で何かを述べるとき接続詞を使って効率を高めようとする傾向があるのかもしれないが、男女差とどのような関係があるのかはわからない。ジャンルごとの接続詞率については佐久間（1979）に以下のデータがある。

入社試験小作文27.89%（男女合わせた値）→新聞社説24.80%→新聞  
コラム17.40%→巻頭随筆（会話文除く）16.92%→小説14.79%

そして「一般に学術論文のように書き言葉的要素が強く堅い感じの文章には比較的接続語句の使用が多く、小説のような話し言葉的で柔らかい感じのものには少ない傾向が見られる」と述べている。このようなジャンル或いは文体印象の違いと男女差との関係についても今の段階ではわからないが、学術論文のような文章では男女差が出にくいのではないか。また作文というジャンルは少し特殊で、「2. 研究方法」でも述べたように、テーマによっては、様々なタイプの文章が混在することになる。そのため接続詞率の男女差が出にくい、ということも考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

接続語句の使用傾向に男女差はあるのか、2つの先行研究と比較しながら、小・中学生の作文を題材に分析を進めてきたわけだが、結果は三者三様であった。これでは、中田（1991）の指摘した表現スタイル及び語彙レパートリー上の男女差を「日本語においてかなり一般性の高い実態」とよぶのはやや無理があるだろう。むしろ、接続語句の使用傾向には絶対的な男女差があるのではなく、文章の長さ・ジャンル・テーマ、書き手の表現意識・能力、あるいは、どのような場でどういう目的で書くのか、といった様々な要因が絡み合った結果、男女差が生じる場合がある、といった程度のものとみるのが妥当と考える。今後は、男女差以外の条件を統一した上で、「4.3. 考察」で指摘した可能性について確かめていきたい。

<sup>131</sup> 金田一 (1988 p 18-19) 等

<sup>132</sup> 加藤 (1976 p 292-293)、寿岳 (1979)、金田一 (1988 p 38-40)

<sup>133</sup> 佐久間 (1979) では接続語句を「文レベル以上の思考の展開を把握するため、文中使用のものは除外し、文頭に位置して、前文あるいはそれ以前の段落や文集合と関係するものに限っ」ている。本稿でも、接続語句の用例数を文中使用のものを含めた場合と含めない場合と二通り出して分析を試みたが、佐久間 (1979) の場合と異なり、接続語句の文中使用の用例が各学年数例ずつしかないので、ほとんど差が出てこなかった。また連関関係別の使用率も二通り出してみたが、比率には影響していなかった。

<sup>134</sup> 但し佐久間 (1979) の異なり語の数は、「順接」「逆接」「添加」の上位3位までのもののみである。

#### <主要参考文献>

- 青木 伶子 (1973) 「<資料>接続詞および接続詞的語彙一覧」『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』 明治書院
- 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 教育出版
- 小川 珠子 (1996) 「日本人児童・生徒・学生及び外国人日本語学習者の作文における接続表現の発達過程」平成7年度お茶の水女子大学大学院修士論文
- 加藤 秀俊 (1976) 「世相とことば」『日本語講座 第三巻 社会の中の日本語』大修館書店
- 樺島 忠夫・  
寿岳 章子 (1965) 『文体の科学』 綜芸社
- 金田一 春彦 (1988) 『日本語 新版(上)・(下)』 岩波新書
- 佐久間まゆみ (1979) 「女性の論理と文章—月刊誌巻頭随筆及び入社試験小作文における接続語句使用の男女比較の試み—」『女性と文化—社会・母性・歴史—』 白馬出版
- 寿岳 章子 (1979) 『日本語と女』 岩波新書
- 中田 敏夫 (1991) 「児童作文資料接続詞にみる男女差」『日本語論説資料』28 論説資料保存会
- 中田 敏夫 (1989) 「国語教科書接続詞にみる男女差」『金沢大学 語学・文学研究』18金沢大学教育学部国語国文学会

(お茶の水女子大学大学院日本語文化専攻修士課程修了)